

◇若穂スマートインターチェンジ説明会が開催される◇

7月17日(水)午後7時より塚本公民館において、若穂スマートインターチェンジ図面説明会が開催されました。長野市道路課から3人が来られ、現時点で検討している案について、約1時間にわたって説明を受けました。住民参加者は28人程でしたが、他地区から参加された方もあり長野市から提供される情報に耳を傾けていました。

若穂スマートインターチェンジは、現在5つの設置形態(案)が検討されており、インター全体の図面や料金所の設置場所などの説明を受けました。スクリーンに映し出されるそれぞれの図面の設置案について長所と問題点などの具体的な提起がありました。

長野電鉄旧須坂・屋代線の高架については、撤去を視野に入れて長野県と長野市で検討中とのことでした。

参加者からは通学道路を含めた側道設置のあり方、インターからの雨水処理、BOXカルバートの活用方法など様々な質問が出され、直に予定された終了時間になってしまいました。

最後に長野市からは令和2年度には新規事業化を目指して計画的に取り組んでいきたいという話があり説明会は終了しました。

(川田地区区長会長 北島光雄)



塚本地区の説明会

◇県土木事業要望現地調査◇

7月16日(火)午後、県の土木現地調査が行われました。長野建設事務所の倉田課長、岡田市議をはじめ市の道路課・河川課、支所等の16名が代表区長・自治区長の説明を受けました。県への要望は若穂全体で116件あり、現場を見て要望内容の確認を行いました。継続要望している案件が多く、予算がつき次第対応をしているとの説明がありました。また、長野建設事務所長と岡田市議員に「県土木事業の整備促進についての要望書」を提出し、早期実施を強く要望しました。(写真は双川橋付近での説明打合せ)



☆☆消防若穂第三分団3位入賞!☆☆

令和初の消防小型ポンプ操法長野市大会が6月23日に戸隠スキー場で開催されました。5年周期で回ってくるポンプ操法ですが、一昨年は保科の第一分団、昨年は川田の第二分団、今年は綿内踏切西側である三分団が出場しました。5月7日のGW明けから早朝の4時30分より約2時間の早朝練習を開始し、2ヵ月間三分団員の40名が上位入賞を目指し練習に励みました。

三分団の過去成績は5年前に準優勝、10年前には優勝を果たしたことから選手たちには、上位入賞はあたり前との重いプレッシャーがありました。団員は選手を思いやり選手たちは団員を思いやり、各々の思いやりからいつの間にか重圧はなくなっていました。そんな中でも諸先輩たちが築き上げてきた、三分団の名誉と誇りを持ってポンプ操法大会に挑んだ結果、長野市全16チーム中、第三位と上位入賞を果たすことができました。

その後、信濃町で開催された協会大会では、選手のケガなど様々なトラブルに見舞われましたが、六位の結果を果たすことができました。遠方まで激励に駆けつけてくれました各区長・関係者様、ご家族の皆様方のご理解とご協力いただき誠に有難うございました。



ポンプ操法を通じて地域には欠かせない一番の団結力を身に付けることが出来ました。「自分たちの町は自分たちで守る!」の消防精神で今後も消防団活動に尽力していきます。

若穂地区の安全と無火災を祈念しまして、お出かけ前と就寝前には今一度火の元確認をお願いいたします。

(若穂第三分団 分団長 玉川健次)

◇地域おこし協力隊から◇

若穂の魅力は… 大野雅和

こんにちは、若穂地区地域おこし協力隊の大野です。こちらに引っ越してきて2年半が経ちましたが、私なりに思う若穂の魅力を語らせてもらいます。最初に挙げるのは「食」です。果物、野菜、お米など皆さんが普段から何気なく食べている若穂産の食材ですが、とてもおいしいです。特に果物はどこに持っていても喜ばれる品質で、里帰りするときには度々お世話になっています。こちらに来るまでりんごにあれだけの種類と味の違いがあることを知りませんでした。8月末から12月初めまで、色々なりんごを食べ比べられるのは産地ならではの贅沢な事です。それと綿内れんこん、歴史的な背景も興味深く、味が格別でここでしか手に入らないのがもったいないですが、それも若穂らしいと今では思えます。直売所ではお米や旬の野菜を購入して我が家の食卓に並びます。知り合いから頂くこともあるので、以前よりも野菜を食べる量が増えました。

次に挙げるのは「風景」です。良くも悪くも観光地化されていない若穂の景色、訪れた人だけが分かる空気があります。私のお気に入りには保科八幡公民館から見る果樹園、市街地と遠くに望む山々。



若穂がどんな場所なのかを物語る景色のひとつだと思います。そしてひっそりと佇む数々のお寺や神社、季節の花々も若穂の良さを引き立ててくれています。

最後に若穂住民の「人柄」を。派手さはなく、まじめにコツコツ、人見知りはあるかもしれませんがおもてなしの精神がある。一度や二度の付き合いではよく分からないが謙虚さの中に見え隠れする温かさがあります。

私の活動をとおして、若穂の魅力がゆっくりと静かに伝えられるようにしたいです。

◇地方都市で老後◇

経済アナリスト 森永 卓郎 (信毎 2019. 7. 14 朝刊から)

東京や大阪といった大都市で年金で生活できる生活設計も可能だが、地方の中核都市なら十分に可能であると考えている。もちろん、過疎地域で「田舎暮らし」、「自給自足」の生活をしてよいのだが、長年大都市で暮らしてきた人にとっては、ハードルが高いと思う。私はシンクタンクに勤務していた時代に、過疎地域の調査にも携わって、その暮らしぶりをつぶさに見てきたのだが、私には正直言って過疎地域の濃すぎる人間関係に、ついていけない部分があるのだ。

その点、地方中核都市であれば、人間関係の距離がほどほどで大きな負担にならない。また、東京や大阪と比べると物価も安いし、家賃や住宅購入の費用は桁違いに少ない。現役バリバリの時は職住接近が必要かもしれないが、定年を迎えたらその必要がなくなるから移住は十分に可能なのだ。中核都市であれば、医療施設も充実しているし文化的な刺激もある程度整っている。普通の年金生活者は、所得税や住民税を払う必要がない。国民保健の保険料も月額1万円に届かない程度で済むし、高額医療費制度のため莫大な医療費を払う必要もない。

山の中で厳しい自給自足生活をするのではなく、大都会の高コストを賄うためにあくせくと働き続けるのでもなく、空気や水がおいしい地域で、安全で安心な都市生活が年金の範囲で実現できる。これこそが大部分の国民が望んでいる本当の悠々自適の老後生活と言えるのではないだろうか。



もりなが・たくろう

1957年東京都生まれ、東京大学経済学部卒。日本専売公社(現日本たばこ産業)に入り、上田市の旧上田工場でも勤務経験がある。三和総合研究所(現三菱UFJリサーチ&コンサルティング)勤務などを経て、2006年から獨協大経済学部教授。著書に「なぜ日本だけが成長できないのか」など

☆ 人口減にストップを掛ける「若穂まちづくり」のヒントがあるように思われますが ☆

【記事訂正】147号の若穂スマートインターチェンジの進み方の進捗は準備会の段階です。お詫びして訂正いたします。

若穂地区住民自治協議会事務局(長野市若穂支所内) ☎050-3583-5700 (E-mail:wakaho.j@grn.janis.or.jp)